

# 66年目の記憶を 今に語る。 上田常春

太平洋戦争で沖縄県宮古島に駐留した上田常春さん。  
今年の春、小竹町の「兵士・庶民の戦争資料館」で企画展が開かれ  
上田さんが戦地から命がけて持ち帰った30点が展示されました。



終戦から5か月、復員予定の上田さんが連れて来られたのは、鉄条網に  
囲われた捕虜収容所でした。塗料で「PW(捕虜)」と書かれた制服で過  
ごした7か月間、上田さんは毎日故郷や家族を思い日記をつづりました。



## 戦地であつづいた日記

「とにかく動いたらだめなんよ。見つからんよう息を潜めて、空襲が終わるまでの20〜30分、鉄かぶと持つてかかんでね。」

「兵士・庶民の戦争資料館」で戦争にまつわる品々を見つめながら、上田常春さん(神崎)はゆつくりと戦争の記憶をたどり始めました。上田さんは大正12年10月生まれ。昭和19年6月、20歳の時に召集令状が届き、久留米の工兵連隊に編入しました。

上田さんが大切に持ち続けてきたものがあります。いつかこの体験を伝えようと、昭和19年9月から復員するまでの約2年間、戦地での生活や自身の思いを書き留めた日記。当時の様子がつづられた紙は色あせ、滲んだ文字が66年の歳月を物語ります。

上田さんは9月に「海上挺身基地第30大隊」に転属し鹿児島へ。11月、23隻の船団を組んだ輸送船が戦地に向けて出発しますが、攻撃により20隻ほどが沈められたといいます。攻撃を免れた上田さんの船は11月15日に宮古島に上陸。



徴兵検査の際の上田さん(20歳)。戦争中は生きて帰るという考えは全く無かったそうです。

## 戦争を今に語り継ぐ

「長い間生死を共にした友を見送り涙がにじむ。——上田さんは、終戦後も次々と倒れる仲間のことなどを日記に記しており、彼らを思うと今でも涙が出る」と打ち明けます。

昨春秋、上田さんはその日記を含む約30点を資料館に寄贈。「恨みも無い相手を殺して、手柄」とされるのが戦争。今では考えられぬ非人間的なことが、父母、祖父母の時代に実際にあったということ、日記や物からぜひ感じてもらいたい」と語ります。

沖縄本島から南西に約300km離れたその島で、上田さんは蛸壺(たこぼろ)づくりなどに従事していました。

## 宮古島を襲った食糧難

昭和20年3月26日、沖縄戦が勃発。連日の空爆で補給路が絶たれ、孤立無援となった宮古島は、深刻な食糧不足で飢餓状態に陥りました。

「カエルやヘビ：とにかく食べられるものは何でも食べたけど、栄養が足りずにみんな骨と皮だけになっていった。ひどくなったら体が腫れてきて、そうならもう助からなかったね」と上田さん。目覚めると隣りで戦友が冷たくなっていた。上田さんはそんな朝を何度も迎えました。火葬をする燃料もなかったため、片方の手首のみに火をつけ、遺骨を持ち帰ったといわれています。

## 当時の品が物語る 沖縄戦。

↓現在資料館に保管されている日記や軍隊手帳。「蛸壺の友」と銘打った自作の戦友名簿からは、仲間が生きた証を刻もうとする上田さんの思いが伝わってきます。



## 「この世の地獄を集めた」 国内最大の地上戦

お年寄りや子どもも動員され、命を落とした20万人のうち、一般住民が約半数(県民の4分の1)を占める沖縄戦。「鉄の暴風」と呼ばれる猛烈な砲撃は地形が変わるほどの威力で、豊1枚あたり百発にあたる数の弾丸が撃ち込まれたといえます。「ありったけの地獄を集めた」と表現された沖縄戦の惨劇を、上田さんは捕虜収容所で「沖縄戦記」として書き記し、今に伝えています。



↑悲痛な思いが記されています。

3か月にわたった沖縄戦。食糧難に陥った宮古島で、上田さんはイモの茎や葉、カエルなどをおかず、飯ごう1杯の米を4、5人で食べていました。自分もいつ死ぬか…栄養失調で倒れる仲間たちを見送りながら、誰もがそう思っていたといえます。



↑当時使われていた水筒と飯ごう(資料館展示物)

「戦争の品を実際に近くで見ても感じていただけるように、館内の品は自由に触れることが可能です」と武富智子館長。

入館無料  
休館 日・月・火  
開館 9:00~17:00  
☎ 09496-2-8565

戦争の記憶が失われつつある今、わたしたちは戦争を一出来事としてではなく、現代の歴史や命とつながっているのだと再認識し、平和の尊さと共に後世に伝えていかなければなりません。